



ウム・ヴェルト株式会社

食品ロスのリサイクル・ループを構築した 後発の廃棄物処理・リサイクル会社



ウム・ヴェルト
マスコットキャラクター
バトン(葉豚)君



ウム・ヴェルト 株式会社
代表取締役社長 **小柳 明雄** 氏

埼玉県加須市は知る人ぞ知る「廃棄物のリサイクル先進市」で、2019年度でのリサイクル率37.1%は県内トップ、全国で見ても第5位の座にある。その加須市内に本社を置き、廃棄物処理・リサイクル事業を営んでいるのが「ウム・ヴェルト」という珍しい名前の会社だ。創業者である小柳明雄社長は紆余曲折を経て、46歳の時にこの業界に足を踏み入れた。持ち前のバイタリティーや先見の明を活かして、いまでは関東エリアで1年・365日、70台以上の回収車がお客様のところを効率よく回るルートを確立している。また、食品ロスを飼料や肥料に再加工し、それを使って養豚や農作物の栽培を行い、自らの手で販売する、「食品ロスのリサイクル・ループ」の構築も実現し、多方面からの注目を集めている。その小柳社長に、これまでの取り組みや現況について、そして後継者に関する考えなどを聞く。

LEADER'S PROFILE

1946年3月、北海道生まれ。1968年、電気電子関係の専門学校を卒業後、松下電器産業(現在のパナソニック)の販売会社に就職。76年、埼玉県杉戸町で「(株)コヤナギ電器」を開業、町内でナンバーワンの電器店となる。92年、ビンや缶のリサイクルを行うウエストリバー北関東を群馬県内で設立。98年、同社を現在のウム・ヴェルトへ移行し、廃棄物全般を取り扱うようになる。元「ラジオ少年」で、趣味の1つがアマチュア無線。自宅には無線室があって故郷の北海道の人との交友を楽しんでいる。また、ウム・ヴェルトが指定管理者として運営する「道の駅かぞわたらせ」に無線クラブを設置し、会員が数十名いる。社長室には昔から欲しくて、最近手に入れることができたオープンリールの中古機があり、気分転換で好きな演歌の曲に聞き入ることもある。

杉戸町ナンバーワンの電器店のオーナーに

——小柳社長が現在の会社の前身となる「ウエストリバー北関東」を創業されたのは46歳の時ですね。以前から産業廃棄物処理・リサイクルの仕事に携わっていらっしゃったのですか。

子どもの頃は、はんだごてを手に真空管ラジオのキットを組み立て、完成したラジオから番組の音声が出てくるのを喜ぶ「ラジオ少年」でした。高校時代には「修学旅行に行かなくていいから」と両親を説得して、旅行費用を電気部品の購入に充てたほどだったのです。

1966年に北海道の高校を卒業しますが、「東京

で身を立てる、生まれ故郷には二度と戻らない」と決意し、都内にある電気電子関係の専門学校に進学しました。卒業時に選択した進路先が、松下電器産業(現在のパナソニック)の販売子会社で、埼玉県内を担当する営業職に就きました。主な仕事は系列電器店である「ナショナルショップ」への家電製品の卸売りと、ナショナルショップの新規立ち上げや経営のサポートでした。

——当時は高度成長期の真っ只中で、国民の憧れのカラーテレビ、クーラー、自動車の「三種の神器」が飛ぶように売れたはずですが。

主力製品であったカラーテレビは、当時の値段で1台当たり198,000円もしました。それがナショナルショップ1店舗で、毎月30台、40台、50



台と売れていくのが、当たり前のような状況でした。繁盛店の中には年末のセールで1日に30台も売れたところもありました。1台当たりの儲けが35,000円もあって、ナショナルショップのオーナーは羽振りのいい生活を送っていましたね。

一方で、「土日の休みも返上して働いているのに、自分の月給が少なすぎる」という気持ちが強く、76年に杉戸町内でナショナルショップの(株)コヤナギ電器を開業しました。独立した当初の目標は市内でナンバーワンの電器店になることでした。社員を5人に増やしながら年商2億円まで持っていく、短期間で目標を達成できました。

しかし、家電量販店が誕生し始めると、競争が厳しくなり、販売価格の低下とともに利幅も縮小したので、以前のように儲けからなくなりました。生活には困らないものの、自ら選んだ仕事に対してやるせなさを募らせていくようになったのです。

早い段階で気が付いた下請け体質のリスク

— そうした中で転機が訪れたのですね。

頭打ちの状況について思い悩んでいることを北海道にいる同級生に話すと、「川口市で事業をしている弟の会社が繁盛しているので、紹介するよ」と言われ、話を聞く機会を得ました。東京都内にある大手清涼飲料メーカーのビンや缶の回収・リサイクルを請け負っていて、日頃乗っている自動車は国産の最高級車と聞き、「世の中には、たいそう儲かる仕事もあるんだ」と驚きました。

儲かるのは当たり前で、リサイクル処理費が1㎡当たり6,000円という、いまでは考えられない破格の価格で請け負っていたのです。さらに大手清涼飲料メーカーから廃棄される大量のビンや缶の半数を引き取っていたのです。「自社で全て扱い切れないから、小柳さん一緒に会社を作ってリサイクル事業をやってみませんか」と提案され、92年9月に群馬県邑楽郡板倉町に設立したのが「ウエストリバー北関東」です。

しかし、実際に組んで仕事をしてみると、いわゆる「どんぶり勘定」だったり、大手清涼飲料メ



ウエストリバー北関東 車両写真

ーカーに頼り切りの「一本足打法」だったり、危うい実態が徐々にわかってきたのです。「完全な下請けのまましているとリスクが大きい」と判断し、独自に群馬県や埼玉県内にある飲料メーカーの新規開拓に乗り出しました。

— 業界内でまだ新顔であった会社が、何を武器にしてアプローチしたのでしょうか。

「1㎡当たり2,000円」という請負価格です。安い価格でも、全体で取り扱う量を増やしていけば、ビジネスとして十分に成立します。それと自前の処理工場を持っていて、1年・365日、お客様のご要望に合わせてビンや缶の回収をして処理できることでした。当時、同業他社で工場を持っているのは、10社に1社程度で珍しい存在だったのです。そうした結果、「安い価格で柔軟に対応してくれる」ということで重宝がられるようになりました。

蛍光灯のリサイクルでオンリーワンを目指す

— そして、パートナーとの提携を解消して98年3月に設立されたのが「ウム・ヴェルト」ですが、とても珍しい社名ですね。

新会社への転換に当たって、新しい社名を社員と一緒に考える中で上がってきたものです。初めて聞いた私は、その意味がわからず、発案した社員に尋ねました。すると、『um(周囲の)』と『welt(世界)』を語源とするドイツ語で『環境』を意味します。もともとドイツには廃棄物という概念がなく、リサイクルしていく考えが国全体に浸透し

ています。私たちが廃棄物の処理やリサイクルの道を進んでいくのなら、その姿勢を示すのにふさわしい社名ではないでしょうか」と答えが返ってきて、「それならば」との思いで決めました。

このウム・ヴェルトへの移行を機に、ビンや缶だけでなく、木くず、廃プラスチックや金属からなる混合物、食品残渣、廃棄飲料などの廃棄物全般を取り扱うようになって、業容を一気に拡大しました。同時に、お客様ごとに廃棄物についてどのような悩みを抱えているのかを徹底的に把握するように心がけました。以前、電器店を営んでいたとき、お客様のあらゆる情報を掴んで、そこから潜在的なニーズをすくい上げ、家電製品の売り上げにつなげていったのと同じ取り組みを始めたのです。

——しかし、先発の同業他社ががっちり押さえた市場を切り崩していくのは、並大抵のことではないと思います。

その通りです。後発企業が市場で「ナンバーワン」になることはかなり難しいので、ある特定の分野で「オンリーワン」になろうと考えたのです。そこで目を向けたのが、蛍光灯のリサイクルでした。当時、本社のあった板倉町は埼玉県と接していました。埼玉県内には、蛍光灯のリサイクル業者が1社もなく、企業戦略でいうところの「ブルーオーシャン」の状況だったのです。そして、2002年10月に廃蛍光灯のリサイクルを行う「ウム・ヴェルト・ジャパン」を別会社で設立しました。

とはいうものの、蛍光灯の中には有害な水銀ガ



蛍光灯リサイクル風景

スが含まれており、根元のアルミニウム製金具を外した後、水銀ガスを安全に処理するには特殊な技術が必要になります。その技術開発を産学協同で積極的に組んでくれたのが横浜国立大学でした。また、地元の埼玉工業大学とはアルミ製金具のリユースで、早稲田大学とは本庄早稲田のインキュベーション・オン・キャンパスで低エネルギーでの水銀ガスの回収に関して、産学協同での技術開発を進めました。

その一方で、埼玉県が寄居町にリサイクル工場を集積させた「彩の国資源循環工場」建設を発表すると、真っ先に手を上げました。その後、06年6月にウム・ヴェルト・ジャパンの寄居工場が、彩の国資源循環工場のエリア内で稼働しました。回収したガラスは建築資材、アルミと水銀は金属材料としてリサイクルしています。取り扱う廃蛍光灯量はピーク時に年間2,000tに達しました。この量は埼玉県内でトップですが、全国でもトップ3の座を争うくらいの水準に位置しています。

リーマンショックで倒産の危機に直面

——新規事業も順調に立ち上がって、経営の基盤は安定したように思えます。

実は、そうとは言い切れない状況が常に続いていました。蛍光灯のリサイクルには新規の設備投資が必要でしたし、業況が拡大していけば社員や回収車の数も増えてランニングコストも膨らんでいきます。いつも資金繰りに頭を悩ましていました。そこに追い打ちをかけたのが、08年9月の「リーマンショック」でした。

その余波はリサイクルの分野にも及びました。分別した後に有価物として販売していたペットボトルの価格は、1kg当たり40円前後から12円前後へ急落してしまいました。アルミ缶も同様です。リーマンショック前は、それらの有価物は月2,000万円ほどの売り上げがあり、苦しい資金繰りを助けてくれていました。それが見込めなくなったことで、頭のなかに「倒産」の二文字が浮かんできたのです。



— どのようにして、その危機を乗り越えられたのでしょうか。

全社員に集まってもらい、この厳しい現状の打開策を一緒に考えてほしいと伝えたところ、「個人消費の結び付きが強い食品工場は、これまでと変わらない操業を続けている。ここにターゲットを絞っていったらどうか？」との発案がありました。

そこで町の電器店での経験を活かして、食品工場の廃棄物に関する困りごと探しを行いました。その結果、6～8 m^3 の大型のコンテナが一杯にならないと、廃棄物の回収に来てもらえないことがわかったのです。生ごみですから、当然臭います。働いている人も、近隣の住民の方も不快に感じるわけで、工場としては悩みの種だったのです。

1 m^3 を「リットル」に換算すると、1,000 l になります。普通サイズの浴槽は300 l 程度です。8 m^3 のコンテナは8,000 l ですから、浴槽約27個分にもなります。これが一杯になるのには、大きな食品工場でもある程度時間がかかり、その間に臭いが漏れ続けていたのです。そこで当社では200 l サイズのドラム缶型のプラスチック製専用容器「プラドラム」を用意して、毎日定期的に回収するようにしました。

1社に1つのプラドラムを回収しに行き、処理工場に戻ってくるのでは効率が悪すぎるので、お客様を増やして複数の箇所を回り、荷台が一杯になってから戻るようにルートを組み直しました。3年の時間がかかりましたが、「点を面にする取り組み」を続け、関東に福島と山梨を加えたエリアで、1年・365日、毎日定期に回れるルートを確立しました。

— 回収車にも大きな工夫があるとか。

現在70台以上の回収車が走っていますが、各々の回収車に計量器を付け、お客様が出した廃棄物の重量を正確に測れるようにしています。この業界では「8 m^3 のコンテナなら1回の回収で一律・30,000～50,000円」といった取り引きが不文律になっていました。実際に入っている量は関係なかったのです。それを当社ではお客様の目の前で正確に重量を測り、それに合わせた料金を請求さ



プラスチック製専用容器「プラドラム」

せていただくようにしました。そのため毎日回収にこられても、お客様は安心して廃棄物を出せるのです。

小まめに回収してもらえて、コストも下がるのなら一石二鳥のはず。そうすることでお客様との間で強い信頼関係を築くことができ、長期的な安定した契約にも結び付いてきたのです。

「食のテーマパーク」を運営

— 09年9月に加須市内に本社を移し、20年8月には加須第3リサイクルセンターも設立され、食品ロスを活用したリサイクル・ループの構築という、壮大な構想を実現されていらっしゃる。

食品関係の廃棄物を回収しているうちに、毎日大量の食品ロスが発生していることに疑問を感じていました。廃棄物を回収・リサイクルする業者の一員として、少しでも状況の改善に貢献できればと考え、18年12月に立ち上げたのが、農業生産法人のアグリファームでした。

まず、食品ロスを再利用した飼料を開発し、それをエサとして与える養豚業を始めました。さらに、同じく食品ロスを再利用した肥料も開発して、ネギや蕎麦、にんにく、じゃがいもなどの栽培もスタートさせました。そこで生産された農畜産物の一部を、当社が指定管理者として運営する「道の駅かぞわたらせ」で活用するようにしたのです。

ラムサール条約湿地に登録された「渡良瀬遊水地」が一望できる自然豊かな場所に隣接したうえ



アグリファームの農業と養豚の作業風景

に、全国でも珍しい「3県境（埼玉・群馬・栃木）」という好立地にある「道の駅かぞわたらせ」は、週末ともなると大勢のお客で賑わいます。施設内の食堂では、自社ブランドの「くろまめ豚」や自社農場で栽培された蕎麦粉を使った料理を提供しています。また、ネギやじゃがいもなど自社の生産物の一部は販売も行っています。

このようにして、「食品工場やスーパーなどで廃棄された食品を回収 → 飼料や肥料として再加工 → 自社の養豚場や農場で活用して農畜産物を生産 → 自らの手で販売」という、食品ロス問題を解決に導くリサイクル・ループが完成したわけです。

近い将来、「道の駅かぞわたらせ」は、農業体験や果物狩りもできる「食のテーマパーク」となり、リサイクル・ループの外部との接点という重要な役割を担っていくこととなります。

——付随していろいろな新規の取り組みも並行して進められていますね。

障がい者就労支援事業を行う「フロイデ」を18年6月に設立し、障がい者の皆さんに食品ロスの分別や、農場での野菜の栽培なども手伝ってもらっています。面白い取り組みとして、障がい者の方のメダカの養殖があり、「道の駅かぞわたらせ」で育てたメダカの販売も行っています。

また、「道の駅かぞわたらせ」では、東京農業大学の学生ベンチャー「うつせみテクノ」と提携して、「昆虫ふりかけ」「タガメサイダー」「昆虫姿スナック」をはじめとする昆虫食の販売も始めています。「昆虫」と聞くと抵抗感を覚えるかもしれませんが、

1kgの牛肉を作るのには8～10kgの飼料が必要になります。一方、1kgのコオロギ肉を作るのに必要な飼料は2kgで済みます。また、コオロギに含まれるたんぱく質の量は、牛肉や豚肉と比較しても遜色ありません。「食糧問題を解決するカギを握っているのが昆虫食」とも言われており、今年から自社でもコオロギの養殖を始めます。

加須市騎西地区で大型焼却施設を建設

——今後の取り組みとして、どのようなことに注力していくお考えでいらっしゃいますか。

まず、21年4月からウム・ヴェルト・ジャパンで開始した太陽光パネルのリサイクル事業があります。東日本大震災後に始まった再生エネルギーの固定価格買い取り制度を受け、日本各地で太陽光発電事業が急増しました。しかし、太陽光パネルは、寿命を迎えると廃棄処分されます。一説には2040年時点での太陽光パネルの廃棄量は約80万tに達し、1年間に全国の処分場で埋め立てられる量の約8%もの規模になるといわれています。

一部の太陽光パネルには鉛やセレンなどの有害物質を含んでいるものもあり、そのリサイクルには蛍光灯のリサイクル同様に独自の技術開発が必要となります。これまで培ってきた技術力と経験をフルに活かして、この太陽光パネルのリサイクル事業においてもオンリーワンになれるように力を入れていく考えでおります。



また、加須市騎西地区に3年ほど前に購入した2,500坪の土地に廃棄物の大型焼却施設の建設計画を進めています。総工費は約50億円で、完成まで早くても4年にかかる見込みです。完成した焼却施設では、余熱を利用した乾燥炉も導入し、食品残渣を乾燥させ飼料の原料にする食品リサイクル施設としても稼働します。自治体からの生ごみの受け入れも積極的に行い、焼却過程で得られるエネルギーを活用した売電事業も考えています。

コロナ禍にともなう経済活動全体の低迷もあって、22年3月期は収益の伸びが足踏み状態でした。廃棄物の回収・リサイクル事業の特徴の1つが、お客様との長期契約が基本であることで、何もせずとも安定した売り上げが見込めます。

今後は既存のお客様との信頼関係を強化して、お付き合いを継続していただけるように努める一方で、新規顧客の開拓も進めていくことが何よりも重要です。23年3月期はグループ全体で売上高54億円の達成を目指していく所存であります。

——最後に、後継者について小柳社長はどうお考えなのでしょうか。

リーマンショック以降、徐々に権限を委譲するようになってきました。現場の近くにいる人間の方が、よりの確かな判断を下せるからです。もちろん最終的な決断は私が行ってききましたが、上がってきた意見は出来る限り尊重してきた結果、現在のウム・ヴェルトグループがあるわけですから、いつ次の世代に任せてもいいと思っています。

今年はウム・ヴェルトの創業30周年に当たり、秋口にセレモニーを行います。その場で副社長の



取材後記

武蔵野銀行 加須支店

平野 晃市 支店長



ウム・ヴェルト株式会社様は関東地方の食品製造会社を中心に1日100トン以上の食品関係の廃棄物を回収し、飼料・肥料に商品化する『食品ロスのリサイクルループ』を事業のコアとしています。

令和2年には彩の国埼玉環境大賞を事業者部門にて受賞されており、同社の取組みが高く評価されています。

また、関連会社を含め、蛍光灯・太陽光パネル等産業機器リサイクル、障がい者就労支援事業、養豚・野菜生産、『道の駅かぞわたらせ』の運営など幅広い分野にて事業展開されており、現在は大型焼却施設の建設計画も進められています。

環境意識が更に高まる状況のなか、時代の変化に柔軟に対応するウム・ヴェルト株式会社様並びにグループ会社様の益々のご発展にお役に立てるよう、これからも尽力して参ります。

矢島を社長にすることを広く発表する予定です。彼は大学卒業後、合格していた公務員ではなく、当社に来てくれました。そして、若手のリーダー役として各事業を伸ばしてきた優秀な人間です。持ち前の経営センスを活かしながら、全てのグループ社員と手を携えて、自分たちのウム・ヴェルトグループに育てて欲しいと願っております。

■ ウム・ヴェルト株式会社 概要

創業：1992年

資本金：1,000万円

従業員：350名（グループ含）

本社所在地：加須市栄368番地1

事業内容：廃棄物循環リサイクル業

取引店：加須支店